

シンポジウム

「資本主義はどう《終わる》のか」

【趣意書】

世界同時不況を期に、最近の資本主義のあり方に対する反省や批判の弁が各方面から聞かれるようになった。資本主義に対する批判的な論調の広がりには、絶えてなかったものといえるが、反面、批判の質、深さについては、問題の核心にまでは至っていないものが、率直なところ、大半だといえる。自分のかけた魔法の解き方を知らなかった「魔法使いの弟子」よろしく、高度な金融工学を駆使し、サブプライム・ローンで低所得層をうまく躍らせたつもりだったウォール街の富裕エリートたちが手痛いしっぺ返しを受け、そのとぼっちり世界に波及しているという程度の認識から、やはり投棄は危ない、実直なモノづくりが一番、といった教訓を引き出してくるというのが標準的なところではないか。

この国の政治に関していえば、先の総選挙における自民党の「小泉劇場」による大勝から一転しての大敗、これは世界資本主義の流れへの適応とその否定的作用への対応、この相反する2つの要求をバランスよく満足させる能力をもちや自民党が持たないことを露呈しての自壊現象であったといえる。それは自民党という一政党の問題にとどまるものではなく、この間、怪物的に成長を遂げた資本主義の制御の困難さを示している。政権が変わったからといって無邪気に事態の改善を期待できないのは、新たな政権党の能力とは別に、問題自体のむずかしさははっきりしているからだ。つまり、依然として資本主義は問題である。

唯物論研究協会は、資本主義に対してつねに批判的まなざしを向け、その問題の理論化に努めてきた。今回の危機にあたり、あらためて《資本主義》を正面から取り上げ、今回の世界同時不況を機縁としながらも決してそれだけにとどまるものではない、資本主義の生み出す現代の危機の諸相を多面的に捉え、それらを資本主義の基本構造との関連で考察し、資本主義がそういった危機を必然的に生み出すのであれば、そのような資本主義をいかに終わりに導くか、その終わりの後に来るべきものが何であるのかという問題を考える——これら一連の課題のための知的共同作業として、本シンポジウムは企画された。

シンポジウムで取り上げられる論点は大きくは以下の3点である。

1. 目下の資本主義の《危機》の《深度》を測る。

まず、今回の危機がどれほど資本主義の構造的な問題とどれほど関わり、これまでの資本主義のあり方に関して、どれほどの変更が求められる事態なのか、この点について認識を深め、共通理解を作りあげる必要があるだろう。アメリカにおけるここ何年か住宅バブルの終わりにすぎないのか、70年代のオイルショック以降に展開した新自由主義的経済政策の破綻か、第2次大戦後のアメリカの中心の資本主義体制の終焉なのか、どれほどの歴史的スパン

ンで今回の問題を捉えるべきかをまず考えなくてはならない。

2. 現代資本主義の作り出す《危機》について

今回の《危機》以前の資本主義が世界を幸福にしていたかといえば、決してそうはいえない。資本主義はその発展のために多様な《危機》作り出し、利用してきた。日本でワーキング・プアの大量発生が問題として取り上げられるようになったのは同時不況以前、記録的に長く続いたとされる好景気の時期である。世界的にも、ナオミ・クラインの著作「The Shock Doctrine: The Rise of Disaster Capitalism」が示すように、新自由主義下の資本の論理の先鋭化は人の不幸を金儲けの手段にするまでにあざとさを増し、ハリケーンといった天災から戦争という人的災厄まで、資本蓄積の機会として利用しつくすようになっている。さらに自然環境についても、資本主義的利潤追求が多くの重大な破壊を生んでいることは広く認知されてきた。世界的に期待を集めるバラク・オバマ政権はグリーン・ニューディールという政策を打ち出しているが、排出権取引がサブプライム・ローンに続く投機の間として狙われているといった指摘を聞くとき、手放しでそれを歓迎することもできない。資本主義の作り出す危機の多様な相をトータルに捉える必要がある。

3. 《危機》を乗り越える方角。

これまでの資本主義体制のたんなる復旧では、資本主義の作り出す《危機》を逃れることができないだろう。かつての社会主義国とは異なる、新たなオルタナティブが模索されねばならない。経済グローバリズムが引き起こす問題に対しては、それを統制するような制度構築が模索されねばならない。また、地球規模での環境破壊を食い止めるためにも、国際的な規制の枠組み、それを作り実効あるものにする仕組みが必要となるだろう。

資本主義の作り出す危機に対する異議申し立てのうち、なかでも《反グローバリゼーション》と総称される世界の動き—それは民衆的な運動もあれば、そういう方向性がすでに政権として結実している国もある—の中では、植民地主義、エスニシティ間の政治的・文化的公正や環境問題にいたるまで、さまざまな方向性や議論が渦巻いている。その抵抗の現場から立ち上がってくる思想をヒントに危機の打開の方向について、資本主義の終わりのその後について考えてみたい。

少なくとも現在の形態の資本主義がただ反復されるということは、その代償に、我々にとって大事な何かが資本に食い尽くされ、最終的に我々の《終わり》が来るまでそれが続くということである。その前に資本主義の《終わり》を構想すること、これは我々の急務である。政権交代により変化に対する漠然たる期待と不安が広がっている現在、新政権による政治の方向性を見極め、評価するためにも、広い視野からの現状認識がまさに必要である。活発な議論を期待する。